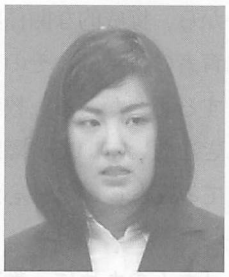
教育実習の報告

不安半分、楽しみ半分

清田若菜
（史学・文化財学科４年）

はじめに



教育実習という言葉を聞いて、どのようなことを想像するだろうか。授業の準備が大変そう、先生や生徒とうまくやっていけるか、寝る暇がない、部活動に参加することが出来る、給食を一緒に食べることが出来る、不安がいっぱい、楽しみもいっぱい、人それぞれ思うことがあるだろう。やはり、わたしも教育実習にのぞむ前、そんなことを思っていた。

小さな島の学校で教育実習を行うということ

私は地元の中学校で３週間の教育実習を行った。私の地元は宮崎県の小さな島である。人口も少なくほとんどの人が顔見知りというような環境である。このため、教育実習校の生徒も生徒の親のこともよく知っている。さらに言えば、その学校の先生方のことも帰省したときに部活動に参加させていただいたということもあってよく知っていた。母校である教育実習校に馴染むという点では、私と同学年である教職課程履修者の人たちよりも馴染むのが早かったと思う。その意味で安心感もあったが、よく知っている人が多いということで不安やプレッシャーも大きかった。

こうした環境であったからこそ教育実習中は、生徒との距離感を作ることがとても大変であった。私の場合、４年生になる前の３月に教育実習校で行われた事前の打ち合わせでは、指導教官から「教師と生徒という立場をしっかりとつくることが大切だ」と言われていた。大変さを感じながらも教育実習中は生徒とどうやって接するのか、これを常に考えていた。たとえば、教師としての接し方と部活動における指導者としての接し方とを区別するのは大変であった。「親しくなりすぎず、近寄りがたい存在になりすぎず」という距離がつかめたかな。そう思えるようになったのは教育実習が終わるころだった。

練習をしてイメージを作るということ

ところで、私は３年生の後学期に初めて模擬授業を行った。自主的ではなく、模擬授業の会の先輩方に声をかけていただいてからである。それまでは、模擬授業を観察するということもほとんどしていなかった。授業の構成の仕方や、学習指導案の書き方など、わからない点が多く、教科教育法の講義で習った程度の知識しかなかった。

初めての模擬授業を行うにあたり、模擬授業の会の先輩方に細かく指導していただきながら準備を行った。また、きれいに板書をすることが出来なかったので、空き教室を使い板書の練習を何度も行った。

模擬授業本番では、とても緊張していた。あえて大きな声を出すことや、出来るだけ笑顔で授業を行うことを心掛けた。時間配分や板書は練習していた通りに行うことが出来たものの、生徒側からすれば、教科書を読んで板書を写して話を聞くという、とてもつまらない授業だったと思う。

４年生になり、教育実習の直前にもう一度模擬授業を行った。このときは、生徒にいろいろと質問をしたり、教科書や資料集を活用したりして、一方的な授業にならないように心掛けて行った。しかし、板書の量が多かったこともあり計画していた通りには授業をすることができなかった。

教育実習前に行った模擬授業は２回のみでどちらも納得のいくものではなかった。しかし、このようにあらかじめ、模擬授業を行ったり、ほかの人の授業を観察してよかったと思った点は、教育実習中の授業はこの様にやればいいんだというイメージを自分の中に作ることができたということである。

教育実習中の授業実践では、模擬授業で行っていた授業と学校現場での授業が違っていて最初はとても驚いた。たとえば、教科書を読んで、板書をして、というような授業ではなく、資料集や教科書を使いながら調べ学習をするといった生徒主体の授業であった。もちろん、調べ学習ばかりの授業というわけではなかった。板書をするという授業もあった。それでも、板書の内容は最低限に限られていた。とはいえ、大学で模擬授業を行ったことは無駄であったとは思わなかった。なぜなら、あらかじめイメージを自分の中で作ることができていたし、さらに言えばわかりやすい板書の仕方や、生徒に対するわかりやすい説明の仕方を早くから意識するようになり、学ぶことができるようになったからである。

おわりに

３週間乗り切れるか。教育実習前は不安だった。終わってみると、１日１日が楽しくあっという間に過ぎていった。教育実習前にもっといろんな勉強をして、授業の練習もいっぱいしていればよかった。正直そう思うところもある。

教育実習を控えている方は、専門教科の知識、人前に立った時に大きな声で話すことを身につけていてほしい。今からでも始めるのは遅くない。教育実習を終えた後に「先生になりたい」と心から思えるような教育実習になるように頑張ってください。

生徒に歩み寄る

後　藤　奈　々
（史学・文化財学科4年）

はじめに

私は３週間、母校の中学校で教育実習を行った。担当学級は２年１組で、朝の会・帰りの会も行なうことになった。主に私を指導してくださったのは、教科指導担当の先生と配属された学級の担任（美術）の２名の先生であった。

授業は１・２年生の地理的分野と歴史的分野、３年生の公民的分野の授業を受け持つことになった。実践した回数は社会科を13回、２年生の道徳を１回行った。その他に期末考査の試験監督を３回行った。

コミュニケーションをとること

①こちらから話しかける

「生徒の名前と顔をしっかり覚えてコミュニケーションをとる。」

これは、私が教育実習前に立てた目標である。人見知りをしてしまう私自身が克服すべきことを目標にし、教育実習に臨んだ。

このような目標を立てて迎えた初日だったが、私は生徒を前にして、緊張で何を話したらよいのか、どう接すればよいのかが分からなくなってしまっていた。その１日は生徒の名前を覚えるどころか、コミュニケーションをとることもできず、終わってしまった。

このままではいけないと思った私は放課後、学級担任の先生に相談した。「先生に興味を持っているが、生徒たちは恥ずかしがって自分からは来てくれない。勇気を出して先生から話しかけてみてほしい。必ず答えてくれるので、根気をもって

やってもらいたい。」と教えられた。教育実習生には生徒の方から来てくれると思っていたが、その言葉で勘違いであったことに気づかされた。出来るだけ多く生徒と接するために何かをしようと決め、毎朝生徒用玄関で挨拶をすることにした。

②名前を覚えること

教育実習２日目の朝７時45分から生徒用玄関に立った。急に私が立っていたので生徒は驚いていたが、挨拶をすると元気に返してくれた。毎日続けるうちに、少しずつ挨拶以外の会話も増えた。その中で自然と生徒の名前を覚えていった。

特に担当学級の生徒の名前は事前に受け取っていた顔写真つきの名簿で覚えるようにした。また、他学年の生徒については自分から名前を聞くようにして覚えていった。こうして、生徒を苗字ではなく、下の名前で呼ぶように心がけた。生徒は名前で呼ぶと表情が変わる。本当に嬉しそうな顔をする。生徒から話しかけてくれることが増え、中には何かしらの相談をしてくれる生徒もいた。

担任の先生に報告すると、「生徒たちが相談をしに来るようになったのは、先生を信頼してくれている証拠だよ」と言ってくださった。

③信頼関係を築く

教育実習３週目、研究授業の当日、朝の会で私の研究授業が行われることについて話した。彼らからはすぐに、「先生心配せんでよかよ、私たちに任せて」という声があちこちであがった。研究授業を行なった際はとても緊張したが、生徒に発問をしたり、教科書を読んだりしてくれる生徒を当てることができた。朝の会であがっていた言葉から、私は生徒との信頼関係を築けていると確信していたからである。

コミュニケーションをとるということは、ただ仲良くなるためだけのことではない。授業を行ない、指導をするための信頼関係を築き上げるために必要なことであると思う。そのためには、生徒の輪の中に自分からどんどん入って生徒との距離を縮めることが大切だ。このことを教育実習の授業実践において身をもって感じた。

生徒指導に対する考え方の変化

教育実習前、私は生徒指導に対して「問題が起きてから指導するもの」というイメージを持っていた。しかし、生徒指導主事の先生に、「問題が起きてから指導していては意味がない。学校生活全ての場面で全ての教師が、問題を未然に防ぐために指導を行うことが生徒指導で特に大切なことだ。」と言われた。「問題を未然に防ぐために指導を行う。」この言葉は私のイメージとは異なっており、とても驚いた。

実際に教育実習校では常に生徒の様子が気にかけられていた。問題を抱えた生徒の情報交換やその対策についての話し合いが教師間で頻繁に行なわれていた。これが「問題を未然に防ぐために指導を行う。」ということなのだと思った。

また、私は、生徒指導で「先生が指導すると、生徒は無条件に聞きいれるものだ」というイメージをもっていた。しかし、生徒指導主事の先生に、「指導されている生徒が聞く耳をもてているか、これが重要だ」と言われた。この言葉を受けて私は、指導をされている生徒の聞く姿勢について、指導する先生が気にする必要があるのだろうか、と疑問を持った。このことについて先生に尋ねると、「生徒にどんな指導をしても、生徒が聞こうとしていなければ意味がない。だから、生徒が聞く耳をもてているかを、気にかけることが重要なのだ。」とおっしゃった。

その後、私は先生方が生徒の目をよく見て、生徒の話を聞く姿勢を確認しながら指導している場面に多く出くわした。これが「聞く耳をもてているかを気にかける」ということなのだろうと思った。

実際に先生方が指導する場面を観て、生徒指導はやはり教師と生徒との信頼関係があるからこそできることではないかと感じた。

おわりに

教育実習の３週間は本当に短い。生徒とよい関係を築くことができ始めた頃に、終わりがやってくる。だからこそ、この短い期間で生徒の輪の中に積極的に入り、生徒とのコミュニケーションを大事に

しなければならない。私は３週間の教育実習において自らが歩み寄れば、生徒も必ず歩み寄ってくれると実感した。

生徒は教育実習生と話すことを楽しみにしてくれている。だからこそ、勇気を出して自ら歩み寄ってほしい。生徒との間に壁を作らず接することができれば、生徒指導で必要な信頼関係づくりは成功と言えるだろう。皆さんの教育実習が終わった後に、「先生になりたい！」と改めて思えるような実り多きものになることを願っている。

脱「友達関係」

日　髙　　徹
（人間関係学科４年）

はじめに

今年の６月、私は母校である高等学校で２週間の教育実習を行った。「教育実習生でありつつも、教師として身構えなさい」。これは教育実習前に、母校の教育実習指導教諭から受けた言葉である。緊張感をもって教育実習に臨み、生徒に対する否定の重要性を強く学んだ。

高校生との関わり合い

２週間のうち前半は授業観察期間、後半は授業実践期間であった。前半の授業観察は教室の隅で行い、教師の威厳や板書、それに応える生徒の姿勢などを観察した。しかし授業中であるにもかかわらず、生徒の何人かが観察中の私に声をかけてくるのである。それも挑発的だったので、私は相手にせず、彼らを避けた。

しかし、さすがに避け続ければ対立を深めるだけだと思ったので、渋々彼らと個別的に話してみると、意外にも素直で、武勇伝などないこと、そして他者との繋がりを求めていることに気づいた。前半の１週間で、不良生徒への嫌悪感や、生徒に対する諸々の先入観が消えた。

後半の授業実践期間では、生徒との信頼関係の大切さに気づいた。私の、生徒と関わろうとする意識が低かったせいで、私と生徒との関係は、全くの他人関係でしかなかった。そのため授業中は、生徒による応えが殆ど無く、むなしさが漂った。そこで、残りの日々は、自ら積極的に生徒と関わり、信頼関係を築くことに努めるようにした。なかでも特に、自分自身が望む進路希望と、親が望む進路希望との間で葛藤する３年生の女子生徒に関わったことが、印象に残る。

「オカンが就職しろっち言うき、もう就職でいいわ。」と、彼女は投げやりに言うが、本人は看護専門学校への進学を望んでいた。３年生にとって進路を考え定めるとは、今後を決める重大な決断になる。私ははっきりと自身の本意を親に伝えないでいることを悪いと否定し、親に自らの望む進路を伝えるように促した。彼女は戸惑っていたが、家で親と真面目に話し合ったようで、その結果、彼女自身が望む進路を目指すことの、親からの了解が得られたのである。

教師・生徒間関係をどう考えたか

この女子生徒との関わり以外にも、同じような関わり方で生徒と向き合い、そのことで生徒が自らと向き合う様子が窺えた。しかし、教育実習中、私は自分のことで精一杯だったこともあり、多く関わったわけではない。それでも関わる際は１対１で向き合い、生徒を一個人として尊重し、真面目な姿勢で臨んだ。真面目に話を聞きながらも悪い点を見つけ出し、いかにきちんと否定するかということに力を注いだ。当然、否定は生徒の反発をかうため、話し合いは長くなる。しかし、生徒が真面目に深く自らを省みることになる。こうして生徒を尊重し、真面目に向き合いながら否定を加えることで、教師・生徒間に一定距離のある、程良い関係が築けることを学んだ。つまり、「悪い」という否定の評価を下す

ことは、一見、生徒との距離を広げるように思えるが、生徒が自らを省みるという自己反省にも繋がるのである。

教師にとって生徒は心の支えになる。しかし、生徒の信頼を得ようと慣れ親しめば、生徒はその教師を友達に近い者として評価してしまう。そうした生徒による評価は、教師と生徒の立場を曖昧にする。そして教師・生徒間における信頼関係の形成を困難にさせる。

本来、生徒と関わりながら、生徒の教師に対する信頼を高めていくことが重要である。一方で、教師の生徒に対する信頼も必要である。両者で慣れ親しむのは間違いだと考える。大切なことは、生徒に近づき過ぎないことであろう。一定距離を置きながらも互いの信頼が保たれる状態。これが教師・生徒間のあるべき関係なのだと、私はこの教育実習で学んだ。

事実、私に相談してきた生徒たちとはその後、互いに依存しない関係が築けたと思う。親し過ぎず、且つ、嫌悪感もなく、明らかに両者の間に一線が存在し、程良い距離がつくれていたと思う。

おわりに

教育実習中、当然、生徒と関わる。そのなかで生徒たちに愛着をもつかもしれないが、教師と生徒が向き合う以上は、親子、兄弟、友達関係ではなく、あくまで教師と生徒の関係を築かなければならない。教師・生徒間において、一定距離を置きながらも互いの信頼が保たれる状態を築くためには、教師が生徒に対して真面目に向き合う姿勢と、必要に応じて否定することが重要である。生徒を「肯定する」ことは、繋がりを保持し、親密さを高める。一方、指導に当たってやりにくい、「否定する」ということは、生徒を真面目にさせ、自らを省みることを促すことができることから、成長のきっかけになる。しかし、否定することは、慎重に行わなければならない。

入念な準備・計画

木　原　真　子
（史学・文化財学科４年）

はじめに

私は、母校の中学校で３週間教育実習を行った。担当は２年生で、授業は３クラスを受け持った。それぞれのクラスを１回ずつ観察した後、すぐに授業実践に入った。社会科は計20回授業を行った。担当のクラスでは学級活動、道徳、総合的な学習の時間も担当した。

それでは、授業実践を行うことに対して、どんな準備・計画を行ったのか。

基礎的知識を身に付けることと教材研究

私は、教育実習に入る前の事前の話し合いで、教育実習中に行うことになる授業範囲を伺っていた。そのため、授業で使うプリントを準備して、教育実習に入った。範囲も専門である歴史的分野であったので、準備はスムーズに行うことができた。

しかし、教育実習が始まると諸事情があり、急きょ地理的分野を教えることになった。地理的分野はあまり勉強することができていなかったので、基礎的な部分から教育実習中に勉強しなければならず、とても大変であった。教育実習中に困らないためにも、早い段階から基礎的知識はしっかりと身に付けておいた方がよい。まずは「教科書を読む」というところから始めたらいいのではないかと思う。

また、たくさんの教材研究を行うことは授業を計画していく中で必要なことである。だが、一つの授業は50分しかない。教えることができる内容は限られてくる。その50分でどのようなことを生徒に一番教えたいのか。むやみやたらに教材研究を行うのではなく、授業のねらいや目標をしっかりもちながら教材研究を行っていくことが大事だと思う。こ

のことは教科活動だけではなく、学級活動や道徳、総合的な学習の時間にもあてはまることである。

生徒観を踏まえた授業の準備

①授業プリントの一長一短

私は、授業プリントを作り、それを中心に授業を行う。

プリントの長所は、穴埋めだけであるので、書く時間を減らすことができ説明する時間が十分にとれるというところにある。一方で短所は、説明が多い分寝てしまう生徒がでてきてしまうというところにある。短所を補うためには、生徒が興味をもつような話を入れながら授業を行うことが必要であると思う。

社会科の場合は特に説明しなければならないことが多い。このため、プリントを作って授業をすすめていくというやり方は有効であると思う。他の教科でも授業内容によっては、プリントを利用してみることも一つの手段であろう。

②発問の奥深さ

教育実習中に、担当の先生から50分の授業のなかに、一か所は生徒自身が考え、説明や論述する活動を入れた方がよいと言われた。大学で行った模擬授業の中でも考えさせる部分を入れて授業を行っていた。教育実習中もいつも通りに発問を考え、生徒たちに問いかけた。大学で行う模擬授業であれば、大学生が生徒役になるにしても、やはり大学生であるため答えがすらすらと出てくる。しかし、教育実習には「生の生徒」がいる。実際に授業を行い生徒たちの反応を見ると、半数近くの生徒は答えを出せなかったのである。

私は、生徒たちのことを考え、理解しようとする気持ちが足りなかったのだと感じた。授業の主体となるのは、生徒たちである。当たり前のことではあるが、改めて生徒の立場に立ちながら準備をすることが大切だということがわかった。

そこで私は計画をたてるときに、予め、生徒の答えを予想しておこうと思った。生徒に問いかけるとどのような答えが返ってくるのだろうか。たくさんの答えを準備しておいた。だが、これだけではまだ生徒の反応はあまり良くならなかった。このため、ヒントとなる資料や話を何個か準備しておいた。さらに準備した発問を自らが受け持っていない他のクラスの生徒にも問いかけてみて、どのような答えが返ってくるのか、その反応を見てみるというやり方も実践してみた。これらのことは担当の先生からのアドバイスであった。

また、発問をした後、十分に時間をとる。これも発問を行う時に気をつけたいこととして担当の先生に言われた。少し答えを待ってみると、生徒から多くの答えがでてくる可能性が高まる。授業時間は50分と限られている。焦って授業を進めがちになる。心に余裕をもって、生徒からの答えを待ってみることも大事だということである。

こうして入念な準備を行っておくと、自ら考え答えることのできる生徒が増えた。たったひとつの発問ではあるが、生徒たちに理解してもらうためにはこれだけの準備をしておく必要があると考える。

おわりに

自分の力で答えを出すことができると生徒の顔が明るくなり、自ら手をあげて発表する生徒が増えた。生徒は、自分たちの意見や考えが認められ、「わかる」「できる」という実感が持てた時に大きな自信となり、次の学習への意欲がでてくる。担当の先生はこのようにおっしゃっていた。多くの生徒がこのような気持ちをもつことができるためにも、生徒のことを第一に考えて、授業の準備を行なわなければならない。生徒理解を深めていくことが、よりよい授業をつくるための基本となるであろう。教育実習を通じて私はそう痛感した。皆さんも入念に準備・計画を行って教育実習に臨んでほしい。

授業を行うことの「難しさ」

江口　祐樹
（史学・文化財学科４年）

はじめに

私は、母校の高等学校で、３週間の教育実習を行った。担当学年は、２年生で教科は地歴科の日本史を担当した。夏休みに教育実習生の打ち合わせが母校で行われた。指導教諭からは「授業の進度が定かではないため、教科書20頁分の範囲をどこでも授業ができる状態にしておいて下さい。」と言われた。20頁分は、奈良時代から平安時代と広範囲であった。私は、該当箇所全ての授業プリントと学習指導案を作成して教育実習に臨んだ。

教育実習では、様々なことを経験する。朝7時に登校し、そこから挨拶運動、朝課外、職員朝礼、ホームルーム、授業、掃除、部活動など様々なことが行われる。教育実習生は、朝課外などの時間に教材研究の時間があり、万全な準備を行い授業に臨むようになっていた。

私の母校は、進学校である。生徒の日本史の貴重な授業の時間を教育実習生である私が担当する。このため、焦りや不安が日に日に増大していった。それは、教育実習生の控室で教材研究を行っていた全員に当てはまっていた。授業が近づくと、皆の顔色が日に日に変わっていったのを覚えている。

「難しさ」－３回の授業実践－

①日に日に増した焦りと不安

私の母校では、教育実習生が行う授業は査定授業を含めて３回と決められていた。回数は少ないが、その分、１回１回を大切にしなければならないという気持ちだった。指導教諭との学習指導案のやりとりや教材研究を行う中、最初の授業の日が近づくにつれて、緊張が増してきた。

②列挙された反省点－１回目－

１回目の授業を行ったが、学習指導案の計画通りにはいかなかった。緊張であっという間に授業が終わったという感じである。放課後に行われた指導教諭との反省会では、反省点が列挙された。

例えば、声の抑揚がない、授業プリントについて文字が見えにくい、重要な所が把握できない、発問内容が難しいなどである。一方で良かった点は、時間内に終えたことだけと言われた。

１回目の授業を行い、率直に感じたことは、その「難しさ」である。自らが理解していることと、それを生徒に教えることは全く違う。伝えたい内容が伝わらないのである。また、仮に伝わったとしても、それが本当に生徒の理解に繋がっているかは、不明であった。

③「昨日の方が良かった」－２回目－

教育実習中は、反省を行うと同時に、次の授業のために改善し、準備を早急に行わなければならない。指導教諭からの反省点を引き受け、改善したこととして、授業プリントの文字を大きくしたり、重要な内容を記入したりできるようにした。また授業中には、声の抑揚に気を付けたり、重要な内容に入る前には、「顔を上げて」と促したりした。

こうして、２回目の授業では、自分なりに１回目の授業の反省を活かし、改善できていたと思った。しかし、指導教諭からは、「昨日の方が良かった。」と言われた。

果たしてどこがいけなかったのだろうか。放課後の反省会の中で、「前回の反省に気をとられていて、先生らしさがなかった。」と言われた。確かにその通りであった。１回目の反省点に気をとられたあまり、自分らしい授業ができていなかった。

④自分らしい授業とは何か－３回目－

自分らしい授業とは何か。

結論として、歴史上の人物の生き様や身近なものに焦点を当て、生徒に興味を抱かせることでは

ないかと考えた。

そこで、最後となる３回目の授業では、遣唐使として派遣され、唐の高官になり、日本に帰国することなく亡くなった阿倍仲麻呂の生涯に焦点をあてたり、遣唐使船で書物を食べるネズミの駆除のために猫を連れ帰ったなどの余談も交えたりして授業を行った。

はっきりと、自分らしさがでていたのかは分からない。それについての指導教諭からの言葉もなかった。これからも自分らしさを追求していかなければならないと考える。

少なくとも授業が終わると、生徒たちが「先生の授業楽しかった」と言ってくれて、素直に嬉しかった。教師という職業のやりがいを肌で感じた瞬間であった。教科書を教えるだけではなく、自分らしさをみつけ、教科書で教えることが大切だと実感した。

おわりに

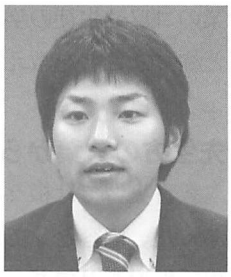
授業を行うにあたって、授業の中で、生徒たちに何を一番伝えたいか、どのような力を身に付けさせたいかを明確にし、どのように伝えるかを深く考える必要があると学んだ。そのためにも、教材研究が非常に大切だと再認識した。これはどの教科にも言えることである。

一方で、授業は生徒と共に作り上げていくものである。決して計画された学習指導案通りにならない生き物のような性質を持っている。したがって、臨機応変さも求められる。臨機応変に授業を進めるためにも教材研究が必要となる。

皆さん方が授業を行うことの「難しさ」を肌で感じ、充実した教育実習を送れるよう願います。

動きを観察することと先生方の言葉

西　村　文　哉
（国際言語･文化学科４年）



はじめに

私は母校の中学校で３週間、教育実習を行った。自らが中学時代に学んできた場所で教育実習生としてではあるが先生と呼ばれることに緊張と不安、期待と決意が混ざり合った気持ちで教育実習を迎えた。教科は国語で、担当学級は３年生であったが、１学年１クラスという小さな学校であったため、すべての学年で授業を行った。

先生方の動きを観察すること

「実習中、先生方一人一人の動きを見ておいてくださいね。」これは私が教育実習で最初に言われた言葉であった。

何時ぐらいに出勤して、まず何をするのか。休み時間中、行事中や全校集会の時、先生たちはどのように働き、生徒とどのように関わっているのか。現場の先生はどんな動きをしているのか。学校という場所で行われていることは一体なんなのか。こうしたことを観て知ることが大切だということであったと思う。しかし、私はその意図があまり理解できていなかった。とにかく先生方が行っていることを観て学ぼうと思った。

まずは、様々な先生の授業を観察しようと思い、教材研究は極力自宅で行い、空いている時間は教科に関わらず授業の観察を行うようにした。また、一日の教員の仕事について休み時間は校舎内を歩き、先生方と一緒に生徒と関わる中で、生徒への言葉のかけ方やその日の調子のさぐり方などを学んだ。

一応教育実習生の控室が用意されていたが、その

部屋には荷物を置くときや、着替える時にしか使用することはなかった。ほとんど教室か職員室や廊下などにおり、あまりにも控室を使っていなかったため２週目からは職員室の使われていない机を使わせて頂くほどであった。そこでは先生方と話しをすることが多く、生徒を理解することにとても役に立つアドバイスをもらった。また、担当の先生からも授業のコツや生徒の学習の程度、学校生活での様子など様々なことを教えていただくことができた。

先生方の言葉から学んだこと

教育実習では様々な先生から講話を受ける機会があった。内容としては学校経営、服務、教育課程や生徒指導などであった。その中で最も印象に残った話は校長先生のお話であった。

教師にとって必要とされることは何か。校長先生の講話ではこのことについて学ぶことができた。学力の向上や生徒指導、部活動の充実などを図る前に教師として最も大切なことはなにか。「それは地域を大切にすることである。」そのように校長先生はおっしゃった。正直に言えば、その時私は、地域を大切にすることの重要性をあまり感じることは無かった。どういうことが地域を大切にすることなのか。私には理解することが難しかった。

地域を大切にする。それを実感したのは教育実習中に行われた体育大会の時である。当日の天気は雨であった。私が学校に着いたときにはすでにPTAの保護者の方々と何人かの先生方が雨の降る中、トラック内の水たまりに土を入れてグランドを整備していた。何とか体育大会を成功させようと必死に水たまりを埋める作業をされていた。ここで私は「地域を大切にすること」の本当の意味を理解することができた。学校は生徒と教師だけでは成り立たない。地域の方々の協力があることで学校が成り立つのである。地域のことを考え、大切にしてくれるような先生にはその地域の方々や保護者も協力してくれるようになる。地域が学校に協力することで子どもたちの教育環境は充実していくのである。地域を大切にするためにもまず、地域を愛することが大切だと感じた。地域と学校が連携して子どもを育てていく。教育現場のすばらしさを感じることができた体育大会であった。

この体育大会で私は、他にも多くのことを学ぶことができた。一つ挙げるとすれば、担当学級の担任の先生が反省会の時、私に言った言葉である。

「体育大会や文化祭などの大きな行事では普段の授業や学校生活では身につかないような力を生徒に身に付かせることができる。」

「こういった大きな行事ではその行事を成功させるまでの過程が大切である。」

教育実習中、実際に担当したクラスの３年生は下級生の面倒を見るようになり、指示ができるように変わったように感じた。普段の学校生活よりも体育大会のような大きな行事を迎えると生徒は大きく変わる。

おわりに

確かに授業を行うことは大切である。しかし、教師の仕事は授業だけではない。これは教育実習を終えて私が一番に感じたことである。教育実習前までは教師にとって最も必要なものは授業実践力であると思っていた。けれども、教育実習中に教師の仕事は様々なものがあることを学んだ。担任を持っていたならクラス運営も行う必要がある。他にも部活動や生徒指導などがある。

教育実習では先生方が授業以外で行っていることをたくさん観察することができる。先生方からたくさんの言葉をいただくことができる。学校の先生方の動きを観る事や先生方の言葉を通じて充実した教育実習を送ることができる。皆さんには多くのことを観て知って感じられるような教育実習を送って欲しいと思う。

学校現場を肌で感じる

江　藤　千　恵
（国際言語・文化学科４年）

はじめに

私は、母校の中学校で３週間教育実習を行った。担当した学年は１年生である。教育実習中は、朝と帰りの短学活と、国語、道徳、学活等の授業の観察、実践をした。１年生の２クラスにおいて、国語の授業を８回、学活の授業を１回、実践した。

教育実習中に私が一番大切にしていたのは生徒との関係であった。しかし、教育実習前の私の頭の中には、教育実習生と生徒との関係は、抽象的にしか描かれていなかった。仲良く話ができればいい、おとなしく授業を受けてくれればいい、といったふうにしか考えることができていなかった。

打ち砕かれた教育実習前の考え

①私が観た生徒

どれだけ甘い考えであったか。教育実習１日目に思い知らされた。国語科の授業を観察していたときである。私が観たのは、先生がクラス中に指示を出しても、いちいち指示を出し直さないといけないくらいに注意散漫な生徒たちであった。たとえば、席から立ち上がり、教室を歩き回ろうとする生徒や、席にはついているものの教科書もノートもひらこうとしない生徒がいる、といった状況であった。自分の目で初めて観た「現場」に、正直驚きを隠せなかった。

②特別な支援を必要とする生徒

教育実習校には、特別支援学級が２クラスあった。この生徒たちは、通常通りのカリキュラムに則って授業を進めていくクラスにも在籍していた。

私が教育実習初日に授業観察したクラス以外にも、そういった授業の受け方をする生徒が各クラス２～４名ずついた。後から先生に確認すると、私が見た生徒たちはＬＤと呼ばれる学習障害の可能性が大変高いとされていることがわかった。

③初めて行った授業における生徒

教育実習中に扱う単元の導入として、初めて行った授業のときも、なかには発問に対して考えようとしないで筆記用具を持とうともしない生徒がおり、内心、その生徒ばかり気になってしまいクラス全体に目を向けられていなかった、ということがあった。

こんな状況で授業を積み重ねていき、ひとつの単元を修了させることなど、ままならないのではないか。生徒のリアルな現状を、授業観察する立場ではなく、授業を実践する立場から見たそのときに、教育実習前の甘い考えは打ち砕かれ、教育実習に対する不安が一気に押し寄せたのを覚えている。

私がしたこと

①生徒の氏名を完璧に記憶すること

生徒たちを包括的に見つめ、心の距離を縮めていこうとしたときに、私が一番にしたことは生徒の氏名を完璧に記憶することだった。私の担当したクラスの生徒はもちろん、担当していなかった学年・クラスの生徒も、毎朝の昇降口での挨拶運動に参加することで、顔と氏名を一致させる努力をした。

私が中学生時代所属していたバスケットボール部の活動にも、時間を見つけ可能な限り顔を出し、微力ながら練習の手伝いもした。

そうして授業以外の時間の関わりを増やしていくことで、生徒たちも、学年を問わず私の顔と名前を覚えてくれて素直にうれしく感じたし、生徒たちはよく話しかけてくれるようになり、私が授業を始めてもしっかりと前を向いて話を聞く姿勢を見せてくれる場面が増えていった。

②生徒観を踏まえた授業計画

授業を行ううえでは、その準備にあたって、生徒の状況をしっかり考慮したうえで発問を吟味することに一番気を使った。

生徒に伝わらないことが多く、授業中の意志疎通がうまくできなかったためである。

意思疎通を図るために、ポイントとなるところに、いくつも発問とヒントを考え、授業中の生徒に対する声掛けひとつであっても、生徒ひとりひとりに向けて考えてから発していた。

「学校現場は本当に連携プレーだよ。」

このように、私は生徒との心の距離を縮めようと、自分なりに工夫して精一杯努力した。しかし、これらは一人だけでがむしゃらにもがいていたものと思える。そのことに気付いたのは、教育実習１週目の私を見て、指導教諭が言った一言があったからである。「学校現場は、本当に連携プレーだよ。自ら考えて行動することが一番重要となるときもあるが、心配なことがあったり少しでも違和感をおぼえたときは職員で共有するのが、当然のことなんだよ。」この言葉はこの後も教育実習中に何度も言われ続けた。

ＬＤの生徒の中には、集中力を継続させることができる教科もあればまったくできない教科もあるなど、教科によっては態度にムラができる生徒もいる。そういった生徒の態度は、ＬＤの生徒に対する教員間の認識のズレを生み出すことさえあるという。

クラスや学年を超えて教員同士がコミュニケーションをとり連携することが、生徒のことをもっと分かろうとするときに、たいへん重要になってくるのである。

おわりに

教育実習前は、学校現場の状況など全く分からず、リアルな生徒の考え方や反応を知りえないまま授業を組み立ててみたり、シミュレーションをしたりしていた。その分学校のリアルな現状を自分の目で観たときは衝撃的だった。しかし、その生徒の現状をよく観察することが関係を培っていく第一歩であろう。

観察し、現状を踏まえたうえでひとりひとりに目を向け、自ら工夫して生徒観に見合った授業を組み立て、何よりも先生方と連携をとって、先生と生徒の包括的な関係を肌で感じ、また自らが築けるような教育実習にしてほしいと思う。